202112 口語詩句 12 月選評　　龍　秀美

＜総評＞
動き、音、触感、感覚を捉える言葉は、単に視覚、聴覚、触覚という表面上の感覚器ではなく、それらを総動員して見えないもの、聞こえないもの、触れないものに迫ろうとしているのでしょう。短詩形の言葉は特に。

大欠伸するとき胸にある花野
作者　さいう　愛知県
――精神の自由と身体の自由はもちろん繋がっているが、それがどういう繋がり方をしているのかは個々人で違う。その違いが詩ではないでしょうか。

中庭に舞うつむじ風
いま、きみが僕に見せたしぐさの
破壊力
作者　まちりこ　埼玉県
――言葉で表せないものを「しぐさ」が表す。不意に意味もなく。だから強い。

居場所がそこにしかなかったの
いつも消去法で動くパチンコ玉
作者　トラノオノキスゲ　群馬県
――物の質量と引力によってのみ決定づけられる運命というものがあって、そこに必然的に導かれるのが居場所。それ以外の何でもない。

漆盆川に放れば憂国紀
作者　ササキリ　ユウイチ　群馬県その違
――漆塗りの盆というものはモノとして完結しており美しい。ただそれだけだ。たまたま川に放られても悠々迫らず流れていくだろう。美しい己に何の疑いも持たず。

絡まって解けぬ人間関係に
トライアングルちーんと鳴らす
作者　さいう　愛知県
――トライアングルでも口拍子でもいい。どうしようもない物事は音とリズムで送り出してやる。若い感覚に救いがあります。

長生きは望まないからタンポポの

綿毛みたいな性器ください
作者　藤ほたる　神奈川県
――ありふれているが完全な美しさと、誰もが知っているけれども貴重なはかなさと自由と。そういう性器を持てば無敵かも知れない。

完了と改行のあわい膿んでいる
作者　ササキリ　ユウイチ　群馬県
――そこで終わる？いやまだ続く？どうでもよいが続けることですべてが破壊されるかも知れない。悩ましい。

できるだけ長く生きれば
見えてくるはずだ、

国家を往く鳥の影
作者　さいう　愛知県
――歴史は繰り返すという。何度繰り返せば人間は愚かさから逃れられるのだろう。いやそれは単に見覚えのある鳥の影にすぎないのかも。

忘れたくなかった
許さないことで
つながっていた
どんな形でも
作者　ヒラノユリア　神奈川県
――一番みじめなのは忘れられること。憎んでも許せなくてもどんな形でもつながっておれば、それは愛かも知れない。

聾者の心には
「内語」
が相当に積もるらしい

詩にして外界に降らせてヨと祈る
作者　さくらママ♪　兵庫県
――完璧な音やリズムを求めても果たせない言葉は「内語」という、もう一つの言語になるのかも知れない。日常語と詩の間にも求めてやまないそれがある。

長いものも

巻かれる前にツルリと飲む
渦潮のごと喉鳴らす四国
作者　さくらママ♪　兵庫県
――「うどん王国」四国。その心情の実際をユーモラスに多声的に表現。

もみの木が
一日経たずに
松となる
作者　南風　東京都
――クリスマスツリーが過ぎれば正月の松飾り。シーズンとして捉える外国と違って暦の記号として一瞬の早変わり。不思議なほどためらいの無さは何だろう。